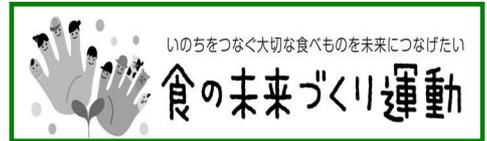


# 東都産直だより NO.2



## ◆今まで通りお届けできるように頑張ります

東都生活協同組合 組合員の皆さま、いつも匝瑳ジーピーセンターのたまごをご利用いただきありがとうございます。

今回の新型コロナウイルスの影響で外食産業や加工用の需要が減る中、家庭内の消費は増え、ご利用点数が急激に増加しています。産直生産者にとっては、先が見えず不安の中で注文が増えることは、励みになっています。

一部の商品では、規格変更や点数制限でお届けしご迷惑をおかけしています。特に「産直平飼いたまご 10個」に関しましては、企画休止となってしまう申し訳ありません。東都生協を核として産地が団結し欠品を回避するように努力をしています。ご理解ご協力をお願い申し上げます。

私たちは自然災害等の度に供給出来なくなる不安からいろいろな備えをしてきました。東日本大震災後の電力不足から大型発電機を導入し、製造できなくなる不安をなくしました。そして、今回私たちはウイルス感染拡大を防ぐために変化を求められています。従業員には、毎朝検温をしてもらい記録し、食堂は一人一人仕切りを付けて食事をしてもらい、手洗い消毒は頻度を増やす等、とにかく従業員の健康チェックは必須になりました。マスクや消毒液の調達も困難で、この数ヶ月、状況は都度変化しており、どのように乗り切るか頭を悩ませています。

これからも今まで通りたまごを供給するために『変わらないことは変わり続けること』と考え頑張ります。  
有限会社 匝瑳ジーピーセンター 業務部 部長 北川義久



## ◆いつも「南国元気鶏」をご利用いただきありがとうございます

「南国元気鶏」の生産農場や製造工場がある鹿児島県では、新型コロナウイルスの感染者数も少なく大都市部と比べると落ち着いた状況となっています。

3月以降は全国の生協で宅配利用が急増したことで、工場の製造能力を大きく上回るご注文をいただいており、組合員の皆さまにできる限り商品をお届けするために休日返上の製造体制を組み、従業員一丸となって対応させていただいています。特に緊急事態宣言後は計画を大きく上回る受注となり、それらをカバーできる製造計画が組めなかったことで、欠品や受注点数制限を生じさせてしまい、ご迷惑をおかけいたしました。

私自身、4月より大口工場に着任していますが、慣れない大口工場の運営と受注量増加に伴う対応に追われて、気苦労が絶えない日々でした。製造現場で働く従業員も疲労が続きますが、この想定していなかった緊急事態を、営業部門と大口工場をはじめとする鶏肉製造部4工場、今まで以上に強固な協力体制を構築することで何とか乗り切っていきたいと考えています。

鶏の生産計画は、関係する農場やえさ・ひなの供給上、需要があるとはいえ簡単には追加生産はできません。製品の製造計画は前年実績をベースに組んでおります。今回のような急激な需要増加の対応など、難しい課題もありますが、今後も、安全・安心・おいしい南国元気鶏を皆さまにお届けするために頑張っておりますので、引き続きのご利用をよろしく願いいたします。

マルイ食品(株) 鶏肉製造部 大口工場 工場長 野畑治



### 産直産地・メーカーから 届け応援動画

組合員のいのちとくらしを守る東都生協。それを支えているのは、新型コロナウイルスの影響で大変な状況でも組合員の願いを受け止め、安全・安心な商品をお届けしてくれる産直産地やメーカーです。そんな産直産地・メーカーからメッセージが届きました。応援メッセージ動画は YouTube「東都生活協同組合チャンネル」で配信中です。

右記のQRコードを読み取ってご覧ください👉👉👉

有限会社 須黒食品からのメッセージ



千葉北部酪農農業協同組合からのメッセージ



## ◆産直野菜を利用いただき、ありがとうございます



台風15号・19号被害義援金 贈呈  
風間理事長(左) 埼玉産直センター山口代表(右)

東都生活協同組合 組合員の皆さま  
日頃 埼玉産直センターの野菜をご利用いただき感謝申し上げます。東都生協さんとは、1984年からの付き合いで、かれこれ36年になります。

この間、いろいろなことがありました。2014年の大雪で多くの施設の倒壊、2019年の台風15号・19号の相次ぐ襲来を受け、施設や畑へ被害が出ました。その度に、組合員さんから頂いた温かい励ましは時に、私たちの背中を押してくれたり、時に前に回って手を引いてくれたりなど、常に寄り添って頂き感謝の念に堪えません。

今回、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、不要不急の外出自粛を要請されております。買い物も制限され、東都生協さんの配達を待っている方もおられることと存じます。こういう困った時に頼りになるかどうかポイントだと思います。私たちも全力で応援します。

現在、埼玉産直センターでは、きゅうり、トマト、ミニトマト等が出荷の最盛期を迎えています。しかし、新型コロナウイルスに感染しないよう、生産者も職員も細心の注意を払いながらの作業となっています。先般、マスクや手指の消毒液等を感染症予防のため、生産者へ配布しました。どこで感染するかわからない、見えない恐怖との戦いですが、私たちは絶対負けません。

組合員の皆さん、この未曾有の難局に打ち勝ちましょう。そして、産直の基本である、生産者と消費者との交流を再開しましょう。共に収穫の喜びを実感できる日が必ず来ます。

私たちは、頑張っている皆さんにエールを送ります。

農事組合法人 埼玉産直センター 代表理事 山口一郎

## ◆食と農のあり方を考える機会です

この度のコロナ危機は社会の在り方を根底から変える可能性があります。私たちの組織も対面して話し合い、表情を見ながら信頼しあい仲間を作り、支えあって農業を続けてきました。しかし、その支えとなるコミュニケーションが断たれれば、いくらIT化やオンライン化が進んでも補いきれないと思います。コロナ危機は2~3年長期化することが確定的になりつつ、不安に負けそうになりますが、私たちの暮らし方や働き方について急いで考え、工夫していく必要があると思います。

近年、私たちの農業は縮小を余儀なくされ、農地は荒廃し地域（農村）は分断され高齢者の孤立が進み、本来なら農業の砦であるべき農協は農村の方を振り向こうとしていません。その結果、日本の2018年度食料自給率は37%まで落ち、63%は海外の食品を食べています。しかし、この度のコロナショックは、農業破壊を進めてきた「世界は一つ」というグローバリゼーションを維持できないことの転機になると思います。はやく自給率を回復する政策に転換すべき時です。さらにもう1点は、今回の危機により見えないウイルスの健康不安、恐怖が浸透してきたことです。マスクをかけ三密を避けることでただ防御するだけでなく、積極的に食生活の改善や食の安全を見直す機会とすべきです。

今後、急速に「健康」にかかわるテーマが最重要視されてくるでしょう。「食と農の在り方」は、東都生協が長年追求してきたテーマです。共に実践する中でコロナと共存する社会を作りましょう。健康と食と農そしてコミュニケーションのいずれのテーマも東都生協が日常テーマとしてきた最も強い活動分野でありますから、一層の活躍と飛躍を心から期待しています。また、私どもも食の担い手として共に活動していくことを光栄に思います。

(有)山形南陽のんのん倶楽部 代表取締役 鈴木秀男

